

近江の村々

原 田 敏 丸

ただいま御紹介をいただきました原田でございます。

御紹介いただきましたように、私は昭和二十八年の春、二十八歳のときに、この大学に採用して頂きまして、当地で初めて学究としての道を歩み始めたのでございます。以後十七年間私の最も元気のいい年頃に、この史料館で研究の基礎を培わせて頂きました。以来今日に至るまで、ずっと引き続き史料館のお世話になってまいりました。いわば、滋賀大学と史料館は、私にとりまして母校に等しいものであり、非常に懐かしいふるさとでもございます。

本学の史料館は、今日でこそ公に認められている国立大学の経済学部の施設といたしましては全国で唯一のものとして広く知られるようになっておりまして、年々史料の収集・整理・保管・研究・公開の実績を着々とあげておりますが、私が関与いたしましたのは、この史料館の草創期、草分けの時代でありまして、昭和二十八年からの十七年間のことでございます。昭和二十八年と申しますと、第二次世界大戦の戦火からようやく立ち直りまして、わが国のあらゆる分野で新しい前進を始めている時代でありました。

学校教育の制度も大きく変りました。戦前、彦根高等商業学校、略して彦根高商という名前で、近江商人との関係もあり、郷土のみなさんに

は格別の親しみを持って頂いた専門学校でありました。これが昇格して滋賀大学経済学部となりましたのは昭和二十四年、一九四九年のことでございます。それから四年後の昭和二十八年に、私はこの大学にお世話になることになったのであります。私はこちらにまいりました当初、西洋経済史の講義を担当しておりました。けれどももと私は自分ですう思っているのですが、実は史料館の要員として採用されたのでありまして、授業に費やす時間以外は、ほとんど史料館の仕事に携わっておりました。

史料館は滋賀大学が発足いたしました昭和二十四年の翌年、すなわち昭和二十五年に、江頭恒治先生という方、この方は「莊園経済史」で大きな仕事をなされ、こちらに來られましてからは、近江商人の研究をなさしまして、今回の展示の主題になっております中井家の研究で偉大なお仕事をなされた方でありますが、この江頭恒治先生の創意と努力によつて、この史料館は創設されたものであります。

当時はこのお堀端の向こうにあった小さな二階建ての倉庫を利用して発足いたしました。時あたかも近世、すなわち江戸時代の庶民史料の散逸を防止するという運動が全国的に始まっておりまして、私も江頭先生の下働きといたしまして、週一、二回の割合で滋賀県下の史料の調査に歩きまわることになりました。これが本日主題の「近江の村々」との御縁の始まりでございます。ここで村々と申しますのは、江戸時代の村のことでありまして、現在の大字、すなわち人々が一つの集落を作つて暮らしている大字のことで、明治以後のいわゆる行政村、即ち行政的に設定された村とは違います。

学問研究の世界でも中央集中ということがありまして、東京にいなけ

れば本格的な学問研究はできないという考え方がありました。地方にいるものは学問研究には無縁の衆生であるという態度にしばしば私も接することがありました。これに対して私ども地方在住の同学の者共は、急行列車で東京からやってきて、数日間滞在して慌しく東京に帰って行く、こういう調査の仕方に頗る疑問を感じておりました。

それからというものは、近江の村々を理解するために、毎週日曜日には必ず、日曜日以外でも滋賀県下の村々を歩き回りました。当面の目標は村々に保存されている江戸時代の古文書を探して、その保存状況を見て歩くということでありました。この調査につきましては別の機会にお話もいたしまして、史料館発行の『研究紀要』という機関誌に収録していただいておりますので、本日はあまり立ち入らないことにしたいと思います。このあと十七年間続きました史料調査のなかで、県下の多くの村々を歩きまして、実に多くの県民のみなさんのお世話になりました。私にとりましては、近江の村々こそ実に私の第二の故郷以上のものがあります。

では、そこで、この近江の村々について古文書の調査以外に何を勉強したのか、何を感じ取ったのかと申しますと、まず目で見る視覚の方から入って申しますと、数十戸の集まりからなる集村即ち数十戸の人々が集まって生活をしている「集村形態」であります。私の先祖伝来の地はどこかと言いますと、九州は熊本、西南戦争の激戦がありました田原坂の近くの農村であります。隣の家との間に、かなり強固な垣根があるのが普通であります。また、私が幼年期に育ちましたのは関東平野であります。当時の武蔵野の農村というのは、各戸の間に畑が展開しておりまして、かなり離れている、いわゆる「散村形態」のところが多かつ

たのであります。それに対して近江で私が見たものは何であつたかと申しますと、例外はあるのですが、基本的に数十戸の家が密集している、いわゆる「集村形態」であります。そして、家と家との間の境界が物理的にも精神的にも希薄であるということでありました。これは、今のことではなくて、今はだいぶ様子が変わっているのですけれども、昭和二、三十年代の話としてお聞きとり頂きたいと思います。

私はその当時非常に驚いた話を一つさせて頂きます。ある時、ある村にまいりまして、古文書を所蔵しておられると聞いておりました家を訪ねましたところが、あいにくそのお宅は留守で、どなたもおられません。当時は、こんなに自由に自動車を利用して走り回るということは、まだ普及しておりませんので、史料調査にまいりますのにも当時滋賀県で鉄道と言いますと、湖東では国鉄と近江鉄道、この二つしかなかったのですが、この鉄道の駅から先は、どこまでもてくてく歩いていた時代です。それから、古文書を所蔵しておられるおうちが留守だと言われて、そのまま帰るわけにいかなくなったのです。困って隣の家に事情を話しましたら、隣の家の人がおっしゃるには、「ああ隣には古文書、古い書きつけが沢山残されていますよ」と言われて、ずかずかその家に入って行って、親戚でもないのに、押入れの戸を引き開けて、ひとくくりの古文書を出してきて下さいました。私のそれまでの感覚からしますと、全くの驚きでありました。私は、「お留守に古文書を拝見してもよろしいんでしょうか」と、大変躊躇したのですが、その人は「かまわないよ」と、何の屈託もない様子で、私が古文書を拝見するのを眺めておられました。どの村でも、このようなことが起こったわけではありませんし、あとで申します「区有文書」、字で所有している古文書のことですが、区有文書

の場合はむしろ、非常に厳格な管理がなされているのが普通であります。しかし、近江の村を歩き始めたころの、この経験は私にとって大変衝撃的でした。この経験によって、私が何を体得したかと申しますと、村を構成している家々の間の障壁が、物理的にも精神的にも、あまり強固ではないということであります。私なりの表現をさせていただきますと、「集落を構成する各戸の個性」、すなわち他との区別意識が非常に緩やかであるということでもあります。

もともと私は、江戸時代の古文書を探すのが主たる目的で村々を歩いておりましたが、村を訪れてまず区長さんの家を訪ねるのが普通でありました。そこでまずもって問題になりましたのが、「各字に保存されている区有文書」でした。区で保存されてきた古文書というのは、一般に区長さんの管理下にあるのが普通でした。現在でもそれが普通に行なわれていることだと思いますが、この区有の古文書は、代々の区長さんが厳重に引き継いで大切に保管されてきました。ところによつては、区長さんを始めとする何人かの役員の方がいて、その何人かの役員の方々が、それぞれ持っている合鍵を持ちよらないと、その古文書の箱が開けられないところもありました。古文書保存の厳格さのなかに、字という共同体、すなわち私がここで申しております「共同体の強固さ」、これを感じ取ったわけであります。この村共同体の大切な歴史にかかわる区有文書を村から出すのについては、村の人たちのなかに、かなりの抵抗感があったに相違ありません。しかし、村の大切な歴史にかかわる古文書の永久保存を国の機関であります滋賀大学の史料館に任せるといふ決断も村の歴史を大事にする「共同体意識」の表れではないかというふうには感じている次第であります。

このような共同体意識の強固さというものが、全国的に見て区有文書の豊富な現存、滋賀県は非常に区有文書が豊富に残っているという現状をもたらしたのではないかと私は考えております。この共同体意識の強固さが、先に申しました集落を構成する各戸の個性即ち他と区別する意識が弱い、緩やかであるということが矛盾なく結び付いている、言い換えますと、「隣近所との境界感が希薄である」、「村と村の外との境界感が強い」というのが、近江の村々の特色ではないかと考えるようになってまいりました。

そのような思いを抱きながら、近江の村々を歩きまわっております間に、近江の村々の共同体意識の強さを知ることができる特徴的なもう一つの事柄に遭遇いたしました。それは、近江の村々のなかには、年の初めの村の行事として、村の出入り口の道に大きな注連縄（シメナワ）を張り渡しているところが、かなりあるということに気づいたのであります。それは何時頃のことかと申しますと、昭和三十年代のことであります。私がこの大学に来て、数年後からこういうことに気づいておりました。近江に昔から住んでおられる方々にとつては、もしかするとこれはたいして珍しいことではないかもしれない、それはよくあることだと思われる方もおられるかもしれませんが、それまで見たことがなかった私にとりましては、大変な驚きでありました。

それ以来今日まで、村入口の注連縄行事の、いわばとりことなつて、村歩きを続けてまいりました。その結果この種の行事は、近江だけではなくということもわかつてまいりました。ほかの地域で申しますと大和、伊賀、山城、丹後、若狭等の地方に分布している。また関東地方や四国、九州などでもいろんなニュアンスを持って、行なわれているということ

がわかつてまいりました。しかし、そのなかで、古いやり方、古式を今に伝えた行事を現在でも最も多く残しているのは、やはり近江であるということができるかと思えます。この近江の村々で今でも年々年の初めの行事として古式にのっとって注連縄を道に張り渡しているところを私が承知している限りあげてみますと、大津市の八屋戸・北大路、栗東市観音寺、湖南市の東寺・西寺・岩根、日野町西明寺、野洲市の富波中・富波乙、安土町内野、東近江市の柴原南と芝原・尻無・上大森・蒲生大森・妙法寺・伊庭・長勝寺・南清水、以上の十八箇所になります。その他に今は張り渡していないけれども、古式に従った注連縄を村の入り口の片側、あるいは目立つところ公民館の前だとか、そういうようなところにかけるところが十五箇所ほどあります。それから、以前は村の入り口に張り渡していたけれど、いまは取りやめているところが十三箇所ほどわかつております。この数はもう少し増えるかもしれませんが。以上のほかに、村の入り口ではなく神社の境内、あるいは参道、もしくは鳥居の付近に張り渡すところは非常に多数存在しております。そのなかのいくつかは、昔村の入り口にあったものが、ある時期にお宮のなかに入ってきた、神社の境内に取り込まれたということが、はっきりしているところもかなりあります。私は、お宮のなかの注連縄の多くは、もとは村の入り口にあったのではないかという想定をしているのですが、必ずしもそうではないという意見もありまして、こんにちまだ結論が出ておりません。ただ村の入り口の注連縄が、だんだん村のなかに入ってきて、ついにはお宮のなかに入ると、こういうケースもかなりあることはたしかでありまして、それがいったいどういう意味を持つかということも、これからの問題になってくるわけでございます。

ところで、近江ではこういう注連縄を「カンジョウナワ」、または「カンジョウツリ」と呼んでいるところが多くて、漢字としては「勧請縄・勧請吊」をあてているのが普通であります。おそらく神仏を勧請するという意味からきたものであらうと思います。変わった呼び名としましては、安土町の東老蘇、西老蘇あたりには「マジヤラコ」というような呼び方もあります。基本的な形としては、村の入り口の道に、長い注連縄を道の両側の立ち木に懸けて張り渡す。その注連縄の中央に、葉の付いた木の枝と、それから竹などを組み合わせて作った丸い輪をつり下げる。ところによつては、それに神仏の祈禱札を取り付けております。この中央に取り付けるもの、この名称は定まっていない。村に行つてこれ何という名前ですかと尋ねても、「名前はわからない、昔からこういうふうに作っているだけです」というところが多い、ほとんどそうなんです。たまたま近江のいくつかの村で「トリクグラズ」という名前を聞きました。それで、この「トリクグラズ」という言葉を私は使うことにさせてもらっています。最近はどうも、いつの間にか、ほかの人も「トリクグラズ」と呼ぶケースを目にするのですけれども、いつしか、これがどうも学術用語のようになっていくようになります。そこでこの「トリクグラズ」という呼び方を使うことにいたしますが、実はこの「トリクグラズ」というものが非常に重要なものでありまして、「勧請縄」の持つ意義を象徴的に表わしている、いわば「勧請吊」の中心的な部分であると私は考えております。鳥に限らず、村にとつて好ましくないものは一切ここからなかには入れない、そういう村の人たちの強い意志、または願望、祈りが、この「トリクグラズ」に込められている、そういうふう

に解釈しております。したがって、神仏の祈禱札も、まさにこの「ト

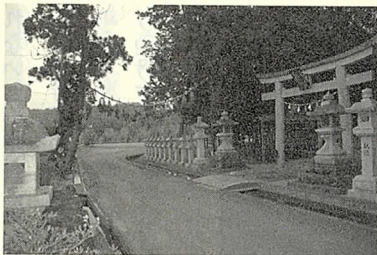
リクグラズ」に取り付けてあるわけでありまして、またその「トリクグラズ」の上の方には、神聖なものを表わす御幣が立てられている場合もあります。

「勧請縄」には、いま申しました中心部分のほかに、注連縄全体にほぼ等間隔に細縄に柿や櫛(しきみ)などの葉のついた枝や白紙を小さく切ったものを取り付けた、房になった縄をいくつかつり下げてあります。その数は十二房、閏年の場合は十三房になるのですけれども、この注連縄の下に下げるものについても名前がわからない。これは何という名前ですかと尋ねても、ほとんど答えは返ってこないんです。名前はわからないが昔からこうやっているんだというのが普通であります。これまた近江のいくつかの村で「コカンジョウ」というところがありました。それで、その名前を頂戴しまして、これも一種の学術用語として私は、「小勧請」という名前を使わせてもらうことにしております。

さらに、この「勧請縄」をくりつけてある両側の支柱があります。昔は自然の立木に懸けておりましたが、それが今はだんだん木が枯れてしまったり、道路の拡張で立木が消滅して、コンクリートその他人工的な柱になっているところが多いです。「勧請吊」行事の一環としてその柱の根元のところに、串の形をした祈禱の札を立てておりまして、そこでお祓いをしたり、祈禱の行事が行われるという場合もしばしば見受けられます。

今まで抽象的に話をしてまいりましたので、次には具体的に今まで説明してきました「勧請縄」のいろんな要素が比較的典型的に具わっている事例を写真によって見て頂きたいと思います。

写真1は旧八日市市の南部(現東近江市)玉緒筋の柴原南と芝原。こ



2



1

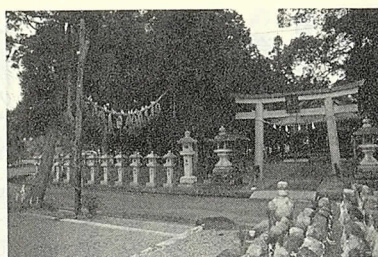
の二つの字で年々交代につっているのですが、この二つの村は非常に接近しております。氏神さんも同じ玉緒神社の氏子でありますから、もとと一体の村であると考えてよいかと思えます。注連縄を張る場所は柴原南の方ですけれども、隣の芝原という字と年々交代でこの注連縄をつっております。柴原南と芝原の共通の氏神で

ある玉緒神社の前に、この玉緒神社に向かってではなく、写真1で御覧頂きますように、村から南西の方向に出る道がありまして、左側に神社があつて、お宮の前の道に横に張り渡してある。お宮さんに向かって張り渡したのではなく、お宮さんの前の道を横切つて張り渡してある。こういうところをご覧頂きたいと思えます。写真2は村の内側から外に向つたかたちなんです

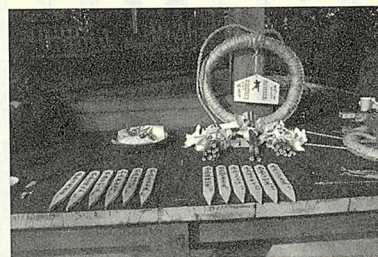
が、これを見てもはつきり、お宮に対する注連縄ではなく、お宮とはむしろ、直角に交わるところの注連縄である。こういうかたちですね。写真3はお宮の正面から見た注連縄の姿なんです

すが、明らかにお宮の前を通つて村から外に出る道に張り渡してあることがわかり頂けると思います。

この注連縄に、いろいろ飾り付け、取り付けてある品々を見えますと写真4の一番手前にありますのは、両方の柱の根もとに立てる祈禱の串です。向こうのほうにある丸いのが、これ



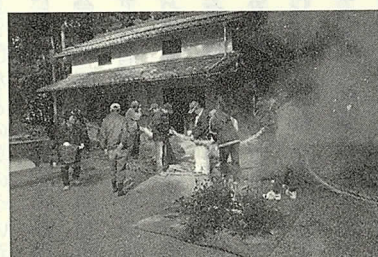
3



4



5



6

が実は「トリクグラズ」の骨格になるわけです。この「トリクグラズ」の真ん中に祈祷の札がさがっておりま。これらは天台宗のお寺で祈祷をしてもらったものです。お寺と神社というのは、われわれが観念的に考えているように、はっきり区別されたものではないのです。天台

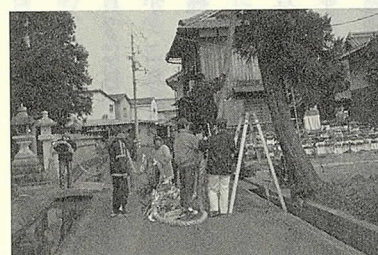
宗のお寺で祈祷をしてもらった祈祷の札が「トリクグラズ」、丸い輪ですね、このなかに下げられている。輪の前にあります

す御幣が、これは柱の横に立てる祈祷の串のまわりに飾り付けられることになるわけです。
この中で一番大事なものは、真ん中の丸い輪、すなわち「トリクグラズ」でして、ここに祈祷の札をさげて、外から村にあだをなすものを入

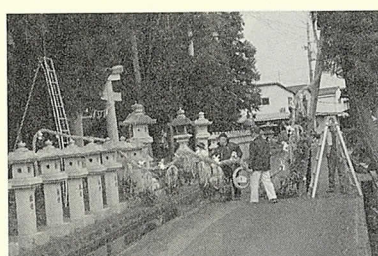
れないという村人の強固な意思を象徴的にあらわしていると私は考えております。写真5は先ほど申しました「小勧請」ですね。注連縄の「トリクグラズ」のまわりに下げる細い縄に、この村の場合は榊の葉枝を取りつけております。



7



8



9



10

写真6は、張り渡す太い注連縄をつくっているところでして、正月の寒い時期でありますので、たき火をたいて作業をしているわけでありま。それでは誰がそういう作業をするかと言いますと、今は二つの集落になっている芝原と柴原南が交代であたるのですが、芝原の方は村のなかで四組に分かれて、当番の組がつる。それからもう一つの柴原南の方は、集落のなかの特定の人々が芝原と隔



11



12

回まわってくることになっています。

写真7はだんだん太い注連縄が完成に近づいています。できあがった注連縄を道路に張り渡すことになるわけですが、写真8・9ではその作業が行われております。写真10でおおよそつりあがりました。こういうふうにはしごをかけて吊り上げるのが古来の姿なんです。

次は東近江市の伊庭というところ。これはもと能登川町ですね。ここ彦根から比較的近いところですが、写真11はこの伊庭の「勧請吊」であります。写真12は氏神さんの正面から見たところですが、この鳥居のお宮は大浜神社といい、伊庭の氏神さんなんです。ここも氏神さんの前を通る道、集落の東の出口になるんですけれども、ここの出口に張り渡しております。

この伊庭というところは特別な集落の組織を持っておりまして、八つの在地（ざいじ）に分かれています。これは地理的に分かれるものではありません。この伊庭の八つの在地がどういう組み立てになっているのか、

年代で受け持っている。ですから、柴原南のほうは一年おきに番が回ってくる。芝原のほうは四組あって、それが順繰り交代して、そのあいだに柴原南が入りますから、八年に一

これはだいたい研究をしないとわかりにくいのですが、この八つの在地のうちで、「仁王堂在地」三十軒のうちの七軒が勧請吊を受け持っております。

写真11・12に見られるようにお宮の手前に道が走っておりまして、その上に道を横切ってつられていきます。つられてしましますと中の「トリググラス」がよくわかりませんので、これも作成中のところを見せてもらったのが写真13です。大浜神社の隣に仁王堂というお堂があります。その中でこれを作成しているのですが、その作成しているところに行って大写真にさせてもらいました。これだとよくわかるのですが、この伊庭の場合には、真ん中の葉っぱ、葉枝というのは桧（ひのき）の葉枝でありまして、竹の輪のなかに竹を縦と横に三本ずつ組んであり、それに桧の葉枝をからませて、完全に輪のなかをふさいでしまっております。見るからに、「ここは何者も通さないぞ」という意思が、強くあらわれていると思います。これは「トリググラス」の典型的な形の一つであります。まさに、村にあだをなす者の侵入を防ぐという村民の、村人の強固な意志を象徴的にあらわしていると考えられるかと思います。

ちなみに、関東地方秩父を中心にした地方では、村の入り口にやはり注連縄を張ったり、大きな草鞋（わらじ）を作って村の入り口に下げる。それをあちらのほうでは「フセギ」と言っております。外から悪いものが入ってくるのを防ぐという感覚を文字どおり表現したものであ



13



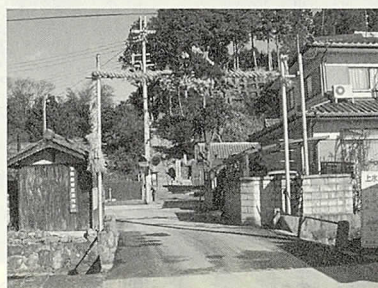
14



15



16



17

は昔からやっているやり方なんですけれども、最近は大変合理的と言いますか、便利なものをだんだん使うようになりました。写真11が張り終わった状態でありま。まさに村の東の入り口を、ここでふさいでいるという形であり

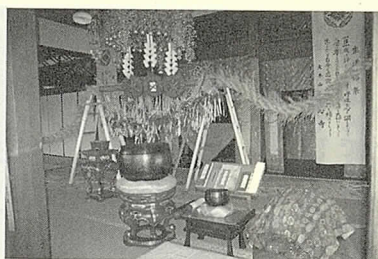
ります。写真14は伊庭の「小勧請」ですね。わらすばに松（ヒノキ）の葉枝を挟んで、それに切り紙を取りつけて、普通の年は十二房、閏年には十三房取り付けます。写真15はできあがった注連縄をつるところに運んであります。つる段になりますと、先ほど見た柴原南の場合は、はしごをかけておりました。あれ

ます。昔はこの注連縄というものは、たわみがあつていかにも注連縄を張っているというふうに見えたんですけれども、最近は大わんでいまして、大きなトラックが下を走るとひっかかって切ってしまう、そういう交通の事情がありまして、だんだんどこでも支柱に木を渡して、それにくりつけるようになりました。いささか注連縄の風情がなくなってきたのが残念ですけれども最近はこのようにところがだんだん多くなっております。

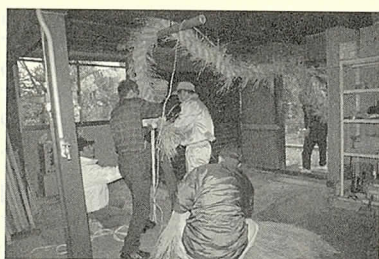
以上、柴原南・芝原と伊庭について、基本的な組み立ての説明をいたしました。あと少し写真を見ていただきますが、だいたい基本的な組み立ては、これまで説明したものと同様でありますので、詳しい説明は省略して参ります。

写真17は同じ能登川町、現在は東近江市になっております長勝寺町、ここもやはり集落の南の出入口のところに注連縄を懸けてあります。注連縄の奥、突きあたりの高いところに、長勝寺という禪宗の山寺がありまして、そこにどういいう人が集まるかというと、このあたりは能登川駅に近く、新しくよそから引越して、近年新しい家を建てた家が多いのですが、昔から住んでいる人たちが、この山寺に集まり、縄を作つて、集落の南の入り口に懸けてあります。

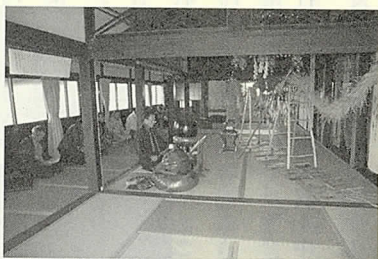
写真18は山寺で注連縄を作っているところでありま。ここでも「小勧請」が作られております（写真19）。この村の場合は、植物として「モチノキ」とか杉の葉枝を用いている。ここは、「小勧請」が多くて、三十六房というのは非常に「小勧請」が多い例になります。出来あがりますと、山寺のお御堂に飾り付け（写真20）、ここは住職さんは今いないのですけれども、檀家総代主導で『般若心経』をあげます（写真21）。こういう



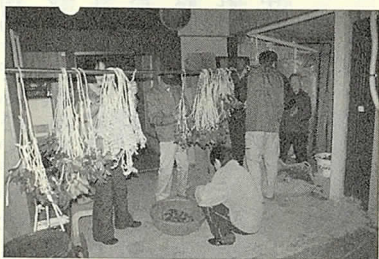
20



18



21

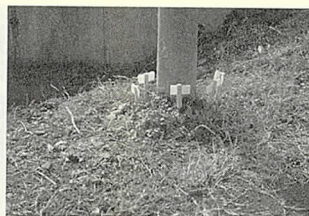


19

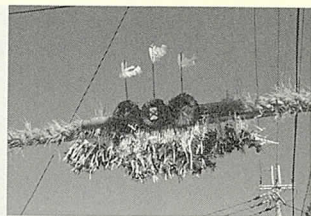
出木戸口)、写真24が北の方の入り口(北出木戸口)です。この字の古くからの住民は東組・中組・西組に分れ、年番の組が二箇所とも同じ形のものをつっています。「トリクグラス」は檜(ひのき)の葉枝を使ってお
り、「小勧請」は、桧(しきみ)の葉を使って飾り付けています。この妙

次に写真23は東近江市の妙法寺。これは旧八日市市内で、御園地区妙法寺町の「勧請吊」であります。妙法寺では、集落の北と東の二箇所「勧請吊」をつっておりまして、写真23は東の方の入り口(東

行事があった後、下の道に懸けに行くわけですが、「トリクグラス」(写真22)が特徴的で三つもあります。真ん中に護符が取り付けられていますが、この「トリクグラス」は杉の葉でできております。



25

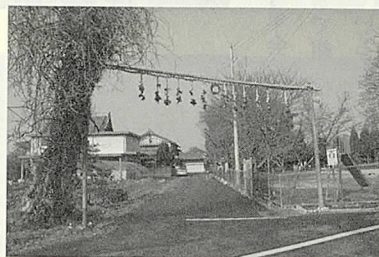


22

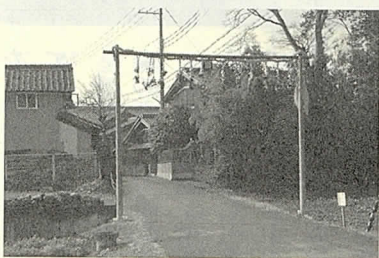
うのは、農業が主たる生業でありますから当然の祈願であろうと思えます。注目すべきは「町内安全」ですね。これはやはり「勧請吊」の一番大事な眼目になっているわけです。今はどこも村がなくなつて、みんな何々町になつてしまいましたが、「町内安全」なんです、昔は「村内安全」と書いた。村の安全を確保するという「勧請吊」の本来の願いが、ここに文字として書かれているというところを注目したいと思います。

次に安土町内野の勧請縄(写真27)は若い衆のうち年齢順に十名が担

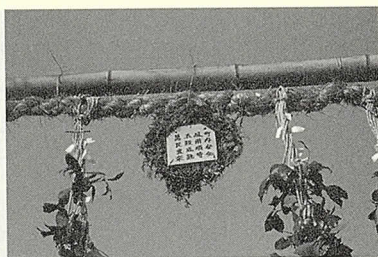
法寺も基本的な要素をすべて備えておりまして、この柱の根もとにも、祈禱札が置かれています(写真25)。



23



24



26

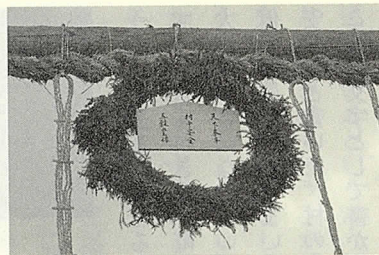


27

当しておりまして、いま行きますと集落の真ん中ではないかというふうに見えるんですけども、以前は昔からの住民はこの「勧請吊」と奥の八幡神社との間に住んでいたとありますので、やはりこれもかつての村の入り口を「勧請吊」でふさいでいたと見てよろしいかと思えます。これも「トリクグラズ」の真ん中にかけてある祈禱札（写真28）、これには「天下泰平・村中安全・五穀豊穰」と書いてあるんです。豊作の祈願は、これはもう当然、農業主体の集落であたりまえのこと、それから村中安全、これはやはり「勧請吊」の一番大事な眼目であって、村民の願望がそこにあらわれている、こう考えてよろしいかと思えます。「村中安全」、これが真ん中に書かれていることに注目したいですね。湖南の方に参りますと、湖南市の東寺の場合は十人衆に出生を届けた順に受ける鬼講（おにこ）二名が担当、家族・親戚が助けて作っております。ここの「勧請吊」は写真29で見えるように、また少し形が変わります。



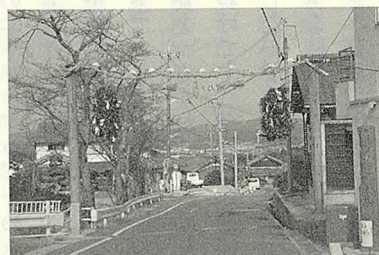
30



28



31



29

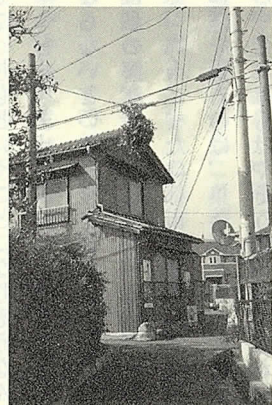
が当たるが、実際は青年会の仕事になっております。ここでも真ん中の「小勧請」は、藤のつるで組んであります。西寺の場合には、この組み方が上のほうに角が出ているような姿（写真31）になっております。これはやはり、外から悪いものが入って来ないようというので、鬼面を

して、真ん中につつてある「トリクグラズ」は藤のつるで井桁を作っていますが、これもやっぱり真ん中をふさいでいることには変りがありません。藤のつるでできていていうところが特徴になっております。その両側に檜の葉枝でつくられた「小勧請」の束が下げられており、かなり特徴的な姿をしております。

それから、東寺の隣の西寺（写真30）の場合は鬼講（青年会）座入り順に三名

象っているとのことであります。

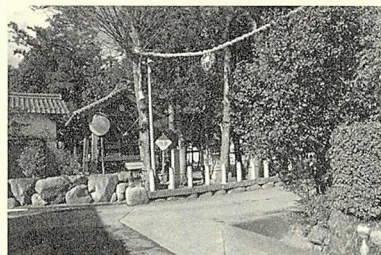
石山北大路町(写真32)では五町内が毎年交替であったり、昔はこの辺は農村で村の行事だったと思うのですけれども、今は住宅地の真ん中に懸けられています。此処が村の外れとは想像しにくいところにつられております。その北大路という集落の南の方に国分という集落があります。この国分へ通ずる旧道の出入口であったと伝えられております。ここでは榊の葉枝と御幣を取り付けた「タレ」(細い藁すば)を十二本(閏年は十三本)下げております。悪魔・悪疫が入らないよう村中の安全を祈禱する趣旨とのことであります。



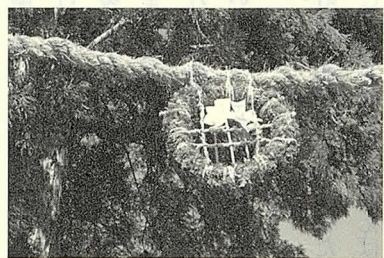
32

最後にもう一つ東近江市南清水(みなみしゅうず)、もと湖東町の南清水では村総出で、早朝暗いうちより村の各戸から若い人たちが出てまいりまして、大変賑やかな注連縄を作る行事がおこなわれて、氏神神明宮の入口に張り渡すのではなくて、その前の道に張り渡しています(写真33)。ここの「トリクグラス」(写真34)は榊の輪の中に御幣を三本立てている。藁の縄で完全にふさいで、ここから悪いものは入ってくるなどいうことです。ふさぐという気持ちですが、この作りにはつきり表われています。そこに御幣を置いて、神の力で村の中に病魔、悪魔、そういうものが入ってこないようにという意識がここにはつきり出ているわけです。ここには「小勧請」はありません。

以上、見てまいりました村入口の注連縄の持つ意味について考えてお



33



34

きたいと思えます。多くの村々で伝えられていることは、大別いたしますと二つあります。その一つは、五穀豊穡の祈願、もう一つは、村中安全の祈願、この二つが基本であります。五穀豊穡というのは、

村の年中行事では、常にいろんなところで祈願をされているのでありますが、農業が主な生業であります場合には、村共同体として当然の願望であらうかと思えます。村入口の注連縄の持つ意味として、特に注目されるべきは後者すなわち村中安全の祈願、これが特に注目される場所でもあります。これは要するに村の平和な生活を脅かすもの、それは村人に仇をなす外敵であれ、あるいは病魔であれ、悪魔であれ、それらが外から村の中に入ってくるにないようなという祈願であります。これはまさに村の安全を村全体として護るという意識に根差すものであると思います。

以上のことは、昔から村の人たちが意識していると否とにかかわらず、持ち伝えてきた一種の世界観とかかわりがあると考えられるのではないかと、これは私の一つの想定であります。村の出入り口をさえぎる注連縄は、明らかに村の内と外とを区別し、その内側は村人の平和な暮らしが営まれる、安全が守られた「日常の世界」、その外側は、時に村人の安全を

脅かす悪魔の住む世界である。村人に仇をなす外敵が襲ってくる空間である。病魔もまた村人を襲ってくる災いであるという意味では悪魔や外敵と同じ範疇に属する。あの注連縄をたまたまつらなかつた年に、この村でコレラがはやった、悪疫が流行して多くの人が亡くなった、それでまた翌年からまたつるようになったという類の伝承を持つていところとは多々あります。だから病魔もやはり外敵の一つ、そういうふうに見える。これら悪魔、病魔、その他の外敵、そういうものを全部ひっくるめて「非日常の世界」「日常の世界」に対する「非日常の世界」と考えてよろしいかと思えます。注連縄は、まさにこの村人にとって日常の世界と非日常の世界というものを厳しくさえぎっている、村人の平和で安全な生活を守るといふ、そういう願いあるいは祈りが込められたものであつたと考えられるのではないのでしょうか。

いま一つ注目しておきたいことは、これまで村入口の注連縄についていろいろな事例を見てまいりましたが、同じ形のもは一つもないという事です。これは近江だけではなく、ほかのところを含めても同じ形は一つもない。これは何を意味するか、近くの村だつたら模倣でもしそうですねですが、向こうの村に習つてこつちもということになりそうですねですが、それが絶対にない、一つもありません。これは他村と自分の村は違ふと、いや違わなければならないという村を主体とする強烈な個性の表われではないかと、これは私の解釈であります、考えているのでございます。これに對しまして、都市、または都市的な影響が及んでいる地域においては、正月に注連縄を張るのは、集落の入り口ではなくして各戸の玄関の前になつてゐる、これはもはやそういう社会においては、集落の入り口よりも家の入り口、ここに重要性を認めようとして

いる、あるいは重要性を感じているからなんです。集落の安全に加えて家の無事息災を大事と考える意識が発生してまいりますと、村入口の注連縄は張つても、また家の前にも張ると、こういうことになる。しまいには村の入り口はなくなつて、家の前に張るのだけが残つてくる。それは共同体としての村の生活がだんだん家を中心とした都市的な生活に変わつてきて、社会の中で村という集団よりも、家が個性を持つようになつたあらわれではなからうかと考えているのであります。

ところで、最後に近江商人との関係はどうかということになりますと、正直なところまだ結論を得ておりません。「勧請縄」というのは、近江だけのものではありませんけれども、他の地方に比べて近江は特に事例が多く、近江の村々の独自性を思わせるに足るものであらうかと思ひます。近江の歴史の特色と言へば、江戸時代、あるいはそれ以前からの商業的發展があるわけでして、これといったどういうふうな整合的に理解できるのかということ、私も大変関心を持つていところであります。

この点についてはまだ結論を得てゐるわけではありませんが、一つだけ気付いてゐる点を申し上げますと、「勧請吊」行事がおこなわれている地域と、江戸時代に商人が多数輩出した地域とは、どうも重なつてゐないやうだといふことであります。これは、マイナスの関係といふことになるかもしれませんが、近江の社会といふものを考える上で、一つの興味ある問題であらうかと思ひます。これは今後の課題とさせて頂きたいと思ひます。

この「勧請縄」をめぐる諸問題というのはまだ、多くの広がりがあり、私もいろいろ考えていることがあります。例えば今、みなさん写真を見てお気づきかと思ひますが、注連縄はお宮に向かつて張られていなくて、

お宮の前の道を横切って張られている場合が多いということです。どうも氏神社というものは、村の中央ではなくて時に勧請縄とともに村の端にあることが多いらしいという、そういうことが考えられてくるわけで、いったい氏神社が村の端にあるということは何を意味するのか、私はこのことと「勧請吊」の問題とをつないで考えているのですが、これも今後の課題として考えているところでございます。

そのほか、全国各地に同様な行事が行われている地域があります。近畿地方でも、近江、大和、伊賀等の中心部分のほかに、この近畿地方の周辺地域にもありますし、関東に行くときに千葉県下、房総半島の各地に「道切り」といって、村の入り口に魔除けとして注連縄を張るところがかなりあります。九州や四国にも若干ですけれどもあります。そういうところと近江の場合とを比較して、近江はどこがいったい特徴的なのか、特色があるのか、こういった点も興味があるところですが、今日はこのあたりで終わらせていただきたいと思います。どうも、御清聴ありがとうございました。